

証道歌

「一」 絶学

君見ずや

絶学無為の閑道人

妄想を除かず真を求めず

無明むみょうの実性ほっしんは即ち法身なり

覺れば即ち了ず 一物無し

本源自性は天真仏

五陰ごおんの浮雲は空しく去来し

三毒の水泡は虚しく出沒す

実相を証すれば 人法無し

刹那に滅却す阿鼻の業

若し妄語を將つて衆生を証かさば

自ら招く拔舌の塵沙劫を

頓に覺了す 如来禅

六度万行 体中に円なり

夢裡 明明として六趣有るも

覺めて後 空空として大千無し

罪福も無く 損益も無し

寂滅性中 問覓すること莫れ

比来 塵鏡未だ曾て磨せず

今日分明に須らく剖析すべし

ほうせき

誰か無念 誰か無生

若し実に無生ならば不生も無し

機関木人を喚取して問え

仏を求めて功を施せば早晩いっか成ぜん

「二」 寂滅

四大を放つて 把握はそくすること莫れ

寂滅性中 飲啄おんたくに随う

諸行は無常にして一切空

即ち是れ如来の大円覚

決定けつじょうの説は 真僧を表わす

有る人うけが肯わずんば情に任せて徴せよ

直だ根源をき截るは仏の印する所

葉を摘み枝を尋ぬることは我れ能わず

摩ま仁にしゆ珠 人識らず

如来蔵裡に親しく習得す

六般の神用は空くうにして空ならず

一いつ顆の円光は色しきにして色に非ず

五眼は浄きようし 五力を得う

唯だ証して乃ち知る 測かたる可きこと難しと

鏡裡に形を看れば見る事難からず

水中に月を捉とらうるも争いかでか粘ねん得とくせん

常に独り行き 常に独り歩す

達者同じく遊ぶ涅槃の路

調べしら古ふり 神清しんうして風自ふうおのずから高たかし

貌かたち頼たのけ骨剛かどうして 人は顧かへみず

「三」 窮ぐう釈しゃく子し

窮ぐう釈しゃく子し 口くちに貧ひんと称しょうす

實じつに是こゝれ身貧みんにして道貧だうひんならず

貧なれば即ち身は常に縷褐を被るも
るかつ き

道あれば即ち心に無価の珍を蔵む
む げ たから おさ

無価の珍 用うれども尽くこと無し
む げ たから

物を利し時に応じて終に悋まず
つ い おし

三身四智 体中に円なり
まどか

八解六通 心地に印す
はちげろくつう

上士は一決して一切了ず

中下は多聞にして多く信ぜず

但し自ら懷中に垢衣を解けば
も みずか く え

誰か能く外に向かつて精進を誇らん

他の謗ずるに従す 他まかの非するに任す
ほう

火を把とつて天を焼くも徒ただ自ら疲るるのみ

我れ聞くも恰あたかも甘露を飲むに似たり

銷融しょうじゅうして頓とんに不思議に入る

悪言は是れ功德なりと観ずれば

此れ則ち吾が善智識じちを成ず

訕謗せんぼうに因おんつて怨親おんしんを起こさざれば

何ぞ無生慈忍の力を表せん

宗も亦た通じ 説も亦是通ず

定慧円明じやうゑにして空に滞ぢやうじちらず

但ただ我れ今独り達了するのみに非ず

河沙がしやの諸仏 体皆な同じ

獅子吼ししく 無畏むいの説

百獸は之れを聞いて皆な脳裂す

香象は奔波して威いを失却すれども

天龍寂じずかに聴ごんえついて欣悦を生ず

「四」 行も亦た禪、坐も亦た禪

紅海に遊び 山川わたを涉り

師を尋ね道を訪うたなうて参禪を為す

曹谿そうけいの路を認得してより

生死相い干わらざることを了知す

行も亦たま禅 坐も亦た禅

語默動静ごもくどうじやう 体安然あんなん

縦たとい鋒刀に遇うも常に担担

仮たとい饒毒薬も也た閑閑ま かんかん

我が師 然燈仏ねんとうぶつ まみに見ゆることを得て

多劫に曾て忍辱仙にんにくせんと為る

幾迴いくたびか生じ 幾迴いくたびか死す

生死悠悠として定止無しじやうし

頓悟とんごとして無生を了じてより

諸々の榮辱に於て何ぞ憂喜せん

深山に入り 蘭若に住す
らんじゃ

岑峯幽邃たり長松の下
しんぎんゆうすい

優遊として静坐す野僧家
ゆうゆう

閑寂たるは安居は実に蕭灑たり
げきじゃく あんじ しょうさい

「五」 覺すれば則ち了ず

覺すれば則ち了ず 功を施さず

一切の有為は法として同じからず
うい

住相の布施は生天の福
じうさう せいてん

猶お箭を仰いで虚空を射るが如し
なや

勢力尽くれば 箭や還また墜おつ

来生うしろごころの不如意を招得す

争いかでか似しかん 無為実相の門

一超して直ただ如来地に入らんには

但もし本を得ば 末を愁うる莫し

浄瑠璃じょうるりの宝月を含むが如し

既に能く此の如意珠を解く

自利他利 終ついに竭つきず

紅月照らし 松風吹く

永夜せいぎやの清宵 何の為す所ぞ

仏性の戒は心地に印し

霧露雲霞は体上の衣

降龍は鉢 解虎の錫

両股りょうこの金環きんかん鳴って歴歴

是れ形を標して虚しく事持じじするにあらず

如來の宝杖ぼうじょう 蹤跡そうしきに親しむ

「六」 真を求めず、妄を断ぜず

真を求めず、妄を断ぜず

二法の空無相なることを了知す

無相は空無く不空も無し

則ち漚漚是れ如来の眞実相

心鏡明らかに 鑑すに礙り無し
うつ さわり

廓然瑩徹して沙界に周し
かくねんえいてつ しゃかい あまね

万象森羅 影中に現ず
しんら

一顆円明にして内外に非ず
ないげ

豁達の空 因果を撥い
かつたつ はら

漚漚蕩蕩として殃禍を招く
もうもうとうとう おうか

有を棄て空に著く 病も亦た然り

還た溺を避けて火に投ずるが如し
ま でき

妄心を捨て 眞理を取る

取捨の心 功偽と成る
こしう ぎ

学人了せずして修行を用う

真成まことに賊を認めて将もつて子と為す

法財を損すて 功德を滅するは

斯この心意識に由らずということ莫し

是これを以つて禅門は心を了却し

頓に無生知見の力に入る

「七」 大丈夫だいじょうふ

大丈夫だいじょうふ 慧剣とを乗る

般若ほこの鋒 金剛ほのおの焰

但げだ能どうく外道くたの心くたを推くたくくたのみに非くたず

早その曾かみ天魔の胆そのを落かみ却みす

法雷ほうを震くい 法鼓うを撃うち

慈雲しを布そき甘露そを灑そぐ

龍象りゅう蹴う踢ていして無む辺へんを潤うるし

三乘さん五性ご 皆みなな惺せい悟ごす

雪山ひの肥に膩に 更さらに雑ざつ無むく

純じゆんら醍醐だいごを出だし 我われれ常じょうに納なむ

一性まは円えんかに一切いの性じやうに通とおじ

一法あまねは偏へんく一切いの法ほふをあまね含くわむ

一月あまねは普ふく一切いの水みづに現あらず

一切の水月は一月に撰おさむ

諸仏の法身は我が性ほっしんに入り

我が性は還また如来と合す

一地に具足す一切地

色に非ず心に非ず行ぎやう業ごうに非ず

弾指だんしに八万門を円成えんじやうし

刹那せつなに阿鼻業あびごうを滅却す

一切の数句は数句に非ず

吾が靈覺りやうかくと何ぞ交渉かうしせん

「八」 毀そしるべからず 讃ほむべからず

毀そしるべからず 讃ほむべからず

体は虚空ことの若がいく涯岸がんな勿なし

当処たんねんを離れず常に湛然

覓もとむれば則ち知る君が見るべからざることを

取り得ず 捨て得ず

不可得ふかとくの 只麼しもに得たり

默時の説 説時の默

大施門だいせもん開ようそくいて壅塞無し

有る人我れに何の宗げを解すと問わば

報じて道いわん摩訶般若まかはんにやの力と

或いは是 或いは非 人識らず

逆行順行 天も測はかること莫し

吾れ早つとに曾かつて多劫を経て修す

是れ等閑とうかんに相あい誑惑おうわくするにあらず

「九」 法幢ほうどう

法幢ほうどうを建て 宗旨を立す

明明たる仏勅ぶつちよく 曹谿そうけい是れなり

第一かしょうに迦葉はじ 首めて燈を伝え

二十八代 西天に記す

紅海を経て 此の土に入る

菩提達磨を初祖と為す

六代の伝衣でんえ 天下に聞こゆ

後人の得道 数を窮むること無し

真も立せず 妄本もと空なり

有無とも俱やに遣りて空空にあらず

二十の空門 元より著せず

一性の如来 体共に同じ

心は是れ根こん 法は是れ塵じん

両種猶お鏡上の痕あとの如し

痕垢こんく尽く除いて光始めて現ず

心法なら双び亡じて性即ち真なり

嵯あ末法 惡時の世

衆生 福薄くして調制し難し

聖を去ること遠くして邪見深し

魔強く法弱くして怨害多し

如来の頓教門ねを聞説ねて

恨むらくは滅除して瓦のごとく碎かしめざ

ることを

作は心わに在り 殃わざは身こに在り

怨訴して更に人を尤とむることを須もちいず

無間の業を招かざらんと欲得せば
むけん ほつ

如来の正法輪を謗すること莫れ
じふほつ

〔一〇〕 梅檀林
せんだん

梅檀の林 雑樹無し
せんだん

鬱密深沈として獅子のみ住す
うつみつしんちん

境静かに林間かにして独り自ら遊ぶ
しずか

走獸飛禽 皆な遠く去る
ひきん

獅子児 衆く後に随い
おお しうえ

三歳にして即ち能く大いに哮吼す
こうく

若し是れ野干やかん 法王を逐えおば

百年の妖怪も虚むなしく口を開かん

円頓えんどんの教 人情勿なし

疑い有りて決せずんば直ただ須らく争うべし

是れ山僧がにんが人我を逞たくましくするにあらず

修行恐らくは断常の坑あなに落ちん

非と不非と 是と不是と

之を毫釐ごうりに差たがえば失うこと千里

是なれば即ち龍女も頓に成仏し

非なれば即ち善星ぜんしょうも生きながら陷墜かんついす

吾れ早年このかより来た学問を積み

亦た曾て疎そを討たずね經論を尋ぬ

分別名相 休することを知らず

海に入つて沙いさごを算かぞえて徒らいたずに自ら困す

却つて如来に苦ろねんごに呵責かしゃくせらる

他の珍宝を数うるも何の益か有らんと

從來そうとう踰さ躑ととして虚しく行ずることを覺さとり

多年枉むなしく風塵なの客と作る

「一一」 觀自在

種性邪しゆじやうにして 錯あやまつて知解ちげし

如来円頓の制に達せず

二乗は精進して道心勿^なく

外道は聡明^{げんみ}にして智慧無し

亦た愚痴 亦た小駸^{しょうがい}

空拳指上に実解を生ず^{じっげ}

指を執して月と為し枉^{むな}しく功を施す

根境法中 虚しく捏怪^{ねっかい}す

一法を見ざれば即ち如来なり

方^{はつめ}て名づけて観自在と為すことを得^う

了^{りょう}ずれば即ち業障^{ごうしょう}本来空

未だ了^まぜざれば還^また須らく宿債を償^{しやう}うべし

飢えて王膳に逢うも餐さんすること能あたわず

病んで医王に遇うも争いかでか差いゆることを得

ん

欲に在りて禅を行ずるは知見の力なり

火中に蓮を生じ終ついに壊えせず

勇施ゆうせ 重じゅうを犯して無生を悟り

早時そのかみ成仏して今に在り

獅子吼ししく 無畏むいの説

深く嗟なげく瞋もうど懂うたる頑皮鞞がんぴたんを

只だ犯重の菩提を障さつることを知つて

如来の秘訣を聞くことを見ず

二比丘有り淫殺を犯すいんせつ

波離はりの螢光は罪結を増す

維摩大士 頓に疑いを除く

還かへりつて赫日の霜雪を銷するに同じ

「一二」 解脱の力

不思議なり 解脱の力

此れ即ち吾が善知識を成なりず

四事しじの供養敢えて労を辞せんや

万両の黄金も亦た銷得せん

粉骨碎身も未だ酬むくゆるに足らず

一句了然として百億を超ゆ

法中の王 最も高勝

恒沙じゆじゆの如来 同じく共に証す

我れ今ま此の如来珠を解く

之を信受する者は皆な相應す

了了として見るに 一物無し

亦た人も無く亦た仏も無し

大千世界は海中あわの漚う

一切の聖賢は電でん抃ほつの如し

仮使たと鉄輪い頂上めぐに旋るも

定慧円明じょうえにして終ついに失せず

日は冷やかなるべく 月は熱あつかるべくとも

衆摩は真説を壊あたすること能わず

象駕崢嶸ぞうがそうこうとして謾まんに途に進む

誰か見る蠅螂とうろうの能く轍てつを拒こばむことを

大象は兔徑とけいに遊ばず

大悟は小節に拘わらず

管見を將もつて蒼蒼そうそうを謗ほうすること莫れ

未だ了ぜずんば吾れ今ま君が為に決せん